ふるさと再発見

春風やさし 刈谷・高浜・碧南

南山大学教授　安田　文吉

◆豊田佐吉の胸像

◆松本奎堂の歌碑

◆「刈谷城本丸跡」の碑

◆刈谷城の本丸跡

◆「刈谷城大手門跡」の碑

◆刈谷市立郷土資料館

「春のうららの隅田川…」ではないが、今回は「春うららの亀城公園」から境川、衣浦湾に沿って、刈谷・高浜・碧南を、徳川家康所縁の跡を芯に訪ねようと思います。今回は名鉄三河線を利用しても行けますが、碧南市の油が渕へ行くには同線北新川駅からちょっと距離がありますので、出来れば車の方がよろしいかと思います。

先ずは亀城公園から出かけましょう。ここなら名鉄三河線刈谷市駅からでも歩いて行けます。亀城公園はもともと刈谷城の本丸と二の丸の一部を公園にしたものです。刈谷城は天文二年（一五三三）水野忠政（第四代緒川城主）が築いた城。刈谷台地の西端に位置し、西に境川（衣浦湾）を、南北に浸食谷を控えた要害の地に築かれました。亀城とも呼ばれますが、その由来はわかりません。あるいはその形状が亀に似ているからかもしれません。徳川家康の母於大の方は忠政の次女。享禄元年（一五八二）緒川城生まれ。天文一〇年岡崎城の松平広忠に嫁ぎ、翌一一年二月二六日家康（幼名竹千代）が生まれましたが、その後すぐに、今川と織田、松平と水野の対立が深まり、同一三年離別、刈谷に戻った於大の方は椎の木屋敷（後述）に住んだと伝えられています。やがて数年の後、於大の方は阿久比（知多郡）の久松俊勝に再嫁しました（「いきいき人生」三・一一・二六号参照）。この忠政築城の城は、二代信元の時、桶狭間の合戦で敗れた今川義元の軍勢によって焼かれてしまい、三代忠重が慶長五年に再建しました。その後刈谷藩となり初代藩主には四代勝成が就きました。この勝成は、慶長八年（一六〇三）京都で成立した出雲のお国の女歌舞妓踊り（但し四条河原では踊っていません）を真似て登場したいくつかの女歌舞妓の一つ出来島隼人一座を刈谷まで呼んで興行をさせ、再び京都へ送り帰しています。刈谷城下の人はこれを楽しんだと思います。以後歌舞伎は元和五年（一六一九）までに、仙台から熊本まで広がっていき、江戸時代を通じて、人々の一番の娯楽になりました。

亀城公園は現在は桜の名所としても知られています。名鉄三河線刈谷市駅からだと逆コースになりますが、まず亀城公園の本丸跡まで登ります。そこから南へ下りてくると右手に尊攘派の天誅組総裁松本奎堂の辞世の歌碑があります。歌は歌人川田順筆で「君が為命死にきと　世の人に　語りつきてよ　峯の松風」。さらに下りて、右に刈谷球場、左に池を見ながら進むと、城町交叉点の手前左側に豊田佐吉の胸像があります。因みに、会社名は「トヨタ」ですが、苗字としての「豊田」は「とよだ」だそうです。佐吉は、慶応三年（一八六七）遠江国敷知郡山口村（静岡県湖西市）生まれで、明治二三年（一八九〇）、名古屋で豊田式木製人力織機を発明しましたが、ここに胸像がある所以は、佐吉が大正一二年（一九二三）刈谷に豊田紡織株式会社を設立、同一五年同所に豊田自動織機製作所を創立したからだと思います。この胸像の隣に「刈谷城二の丸跡」の碑。

ここから真っ直ぐ東に、ローズマリーの垣根を見ながら坂を登ると、左側に郷土資料館があります（月曜休館・入場無料）。ここは昭和初期の建築様式を伝える亀城小学校旧本館の建物で、「刈谷城三の丸跡」の碑もここにあります。館内には江戸時代の資料を中心とする展示が多くあります。刈谷の歴

一九四五年、名古屋市熱田区生まれ。
南山大学人文学部教授。
幼少から名古屋の芸能文化に親しみ、主な著書に「ゆめのあと・諸本考」「幕末・明治名古屋常磐津史」「常磐津節の基礎的研究」がある。
一九八七年よりNHK番組「北陸東海文さんの味な旅」などのレギュラーレポーターとしても活躍。

◆松秀寺

◆秋葉神社

◆旧刈谷市立図書館

◆楞厳寺本堂

◆本刈谷神社

◆文禮館跡の碑

◆於大乃方由緒乃碑

◆柳池院山門

◆椎の木屋敷

史を概観するなら、まずここへ。ここから亀城小学校を左に見て、小学校の垣根沿いに少し進むと、垣根の中に「刈谷城大手門跡」の碑があります。さらに進むと、左手に旧刈谷市立図書館があります。現在はもっと東の住吉町に移りましたが、私が、村上文庫の『由免之蹟　乾』『由免之蹟　坤』の二冊を調査研究のために閲覧に行ったのは旧館の方。村上文庫は、刈谷藩の医師村上家が代々集めた蔵書に、幕末の国学者村上忠順（ただまさ）の収集した書及び著書を加えた約二万五千冊の文庫。『由免之蹟』は一般に『ゆめのあと』と称される、尾張藩第七代藩主徳川宗春の事跡を記したもの。私はこの『ゆめのあと』の諸本を五六冊調査・整理し、『「ゆめのあと」諸本考』として上梓しました。今回ここを訪れたら、旧図書館のみならず、壁を覆っているトタンもかなり赤サビていましたが、村上文庫の旧書庫も残っていて、若い日を懐かしく思い出しました。ここはもともと天明三年（一七八三）開校の刈谷藩の藩校「文禮館」のあったところ。

ここを左折、次の四つ角をまた左折、少し行くと右手に椎の木屋敷屋敷跡の石碑。ここを入って左にカーブして行くと道の両側が、於大の方が暫く住んだとされる椎の木屋敷跡です。右手には「徳川家康生母　於大乃方由緒乃地」の碑が建っています。ここから東側は険しい崖となっていて、刈谷城の守りの東端かと思われます。江戸時代には霊地とされ（國史大辞典）出入り禁止となっていたそうです。椎の木が多く茂っていたところから、この名があると言われています。

ここから南へ戻って交叉点を左折、東へ進んで銀座の交叉点を直進、少し行くと右側に、万燈（まんどう）祭発祥の地である秋葉神社があります。宝暦六年（一五七六、一説に宝暦四年）松秀寺境内に秋葉堂が建立されたのが始まり。安永七年（一七七八）から、天下の奇祭とされる万燈祭が始まりました。旧暦六月の二三・二四日（現在は八月の第一土・日曜の夜、但し神社の高札には七月末の土・日曜とある）の夜、各町内毎に、歴史上の英雄や武者を描いた、高さ四～五メートルの巨大な紙灯籠（万燈）に灯を入れ、笛・太鼓（神様との交信手段）のお囃子に合わせて、火難除け・町内安全を祈願し、神前で舞った後、町々を練り歩きます。神前混雑のため、天明元年（一七八一）以後、町内へ繰り出すことに。私はまだ見たことがありませんが、一度ぜひ拝見したいと思っています。

隣の松秀寺をお参りした後、銀座交叉点に戻り、左折して県道四八号線を南下松坂町の交叉点を右折、その後すぐの斜めの道を左折、またすぐ右折すると本刈谷神社・本刈谷貝塚。本刈谷（宝永七年〈一七一〇〉本多忠良が藩主になると「本」の字を憚って「元」に変えたと言われる）地内の八雲社（前身は牛頭天王社）・北野社（前身は野口天満宮）、熊村地内の八幡社（当地開闢の祖神）を大正二年（一九一三）に当地に合祀したもの。本刈谷貝塚は縄文時代晩期中葉の標準式資料。この辺りまで衣浦湾（海）であったようです。

ここから南へ少し行くと曹洞宗神守山楞厳寺（りょうごんじ）。応永一〇年（一四〇三）遠州浜松の普済寺の利山義聡の開創。この年、ここより北に少し行ったところに海江寺を開きましたが、境内が手狭なため、この寺を開いたと言うことです。禅の修行道場として栄え、七世古堂周鑑の時、水野忠政がこの寺に帰依して以来、水野家の菩提寺となり、於大の方も周鑑から得度をうけました。寺宝の「伝通院（於大の方）画像」は県文化財。因みに、於大の方は慶長七年（一六〇二）八月二八日伏見城中で没、法名伝通院殿蓉誉光岳智光大禅定尼。境内には二代・三代の刈谷城主水野信元・忠重の墓もあります。僧堂・本堂・庫院などは最近新しく作られたようで、まことに美しい。

◆田戸渡船番所後の碑

◆応仁寺本堂

◆蓮成寺山門

◆「おまんと祭」の馬場

◆宝満寺

◆春日神社

◆油が渕夕景

◆人形小路

◆吉浜細工人形「川中島の合戦」

ここから高浜市へ向かいます。楞厳寺から西へ、県道五〇号線（名古屋碧南線）に出て南下し、三河線吉浜駅手前を左折、八幡町四の交叉点を右折、あるいは楞厳寺から東へ、右折して県道二九六号線に入り、小垣江町北沢交叉点を右折南下して、八幡町四の交叉点も直進、久名明の交叉点を右折（但しこの辺りは一方通行が多いので要注意）して少し行くと、天台宗の柳池院。さらにここから少し北へ行くと、浄土宗の宝満寺があります。両寺には、熱田神宮の祭事「花の撓（とう）」を移した「花の塔」と称される豊作を占う行事があり、それに吉浜細工人形が奉納されました。柳池院の細工人形展示場に掲げてある「細工人形由来」によれば、細工人形の素材には、身近な自然物である、穀類の種子や茎、木竹の皮や実、貝殻などを用い、飾り場面には、歌舞伎の名場面や伝説・縁起物が多く、また細工人形の製作には、例えば蛇の鱗は細い竹を薄く斜め切りにして、ヤスリ紙で鋸目を消し、一枚ずつ合わせて付けるなど長時間を要する細かい作業が多いということです（宝満寺の展示場には、製作過程が写真で説明されています）。細工人形は、例年両寺で五月八・九・一〇の花の塔に三場面ずつ展示されます。その始まりは、安政四年（一八五七）の柳池院の御本尊大日如来のお開帳に、加藤佐七が珍しい人形を作ったことだそうです。この辺り、人形小路と名付けて、あちこちに細工人形が展示されています。

ここから久名明交叉点へ戻り右折、南下して平松橋南交差点を直進、すぐに右折して大山緑地へ、ここに春日神社があります。ここは奥の正面に春日神社（左）・八剱神社（右）が、手前左手の広場が「おまんと祭」の馬場、その先に「えんちょこ獅子」が奉納される森前秋葉社があります。祭礼は一〇月の第一土・日曜。えんちょこ獅子は、平成九年一二月に愛知県芸術文化センター大ホールで催された「ふるさとの獅子と歌舞伎」に上演され、好評を博しました。ここから県道五〇号線をさらに南下、横浜橋北交叉点を直進、高浜川を渡ったら右折川沿いに進み、高架になっている国道四一九号線の手前で道なりに左折、少し行くと田戸渡船番所跡・津島神社に出ます。田戸の渡しは、衣ケ浦（ころも）対岸の亀崎（半田市）への渡し。ここからさらに南へいくと宝殿社。ここに田戸神社の碑があります。

ここから県道五〇号線へ戻り南下、病院北の交叉点を左折、途中鷲塚町一で県道二九一号線（米津碧南線）に合流、さらに進んで鷲塚町交叉点を右折すると、浄土真宗本願寺派龍雲山蓮成寺。通称川端蓮成寺。元禄九年（一六九六）の創建。ご住職水野孝文師のご好意で抹茶を一服いただき、旅の疲れが癒されました。ここの本堂は、改築はされましたが、県下真宗寺院の本堂としては原初（創建当時）の面影を残す重要なものです。

ここから今来た道を引き返し、新川を渡って右折、北へ進んで明治橋を渡ったらすぐ右折、少し行くと、左が応仁寺、右が油が渕花しょうぶ園です。まずは松光山応仁寺から。応仁元年（一四六七）の応仁の乱と比叡山衆徒の迫害を避けて、ここ西端へ下向した蓮如は宗門再興を願って一宇を建立、それが応仁寺ということです。その蓮如上人をここへ案内したのが如光上人。如光は油が渕から現れた龍の化身ではなかったかという伝承があるそうです。それにしても、大変大きな本堂で参詣人を圧倒します。この寺の南が油が渕。ここを油が渕というのは、蓮如上人が連夜読経の絶えることがなかったので、池の龍（一説如光）が灯明（龍灯）を掲げて、蓮如上人やそこに集う人を守ったからだということです。灯明の油からの謂いでしょう。この油が渕から眺める夕日はまた格別。かつての蓮如上人の念仏を思いながら、この旅を終えることにします。帰りに碧南市内で饅頭を買いました。とても美味い饅頭でした。